

ボーダーラインケースへの 歯科矯正用アンカースクリューによる 代替治療の適用

Application of alternative orthodontic treatment using orthodontic anchor screws to borderline cases.

日 時・場 所

6月8日(木) 12:10~13:10 ランチョンセミナー1

〒101-8439 東京都千代田区一ツ橋2丁目1-2

学術総合センター一橋講堂 A会場（中会議場1、2）

定員：140名



演 者

日本大学歯学部歯科矯正学講座 主任教授
付属歯科病院歯科矯正科 科長

本吉 満 先生



抄 錄

近年、歯科矯正用アンカースクリュー（以下スクリュー）を固定源として利用した矯正歯科治療が広く行われています。これを口蓋や唇頬側歯槽骨に設置することにより、絶対不動の固定源が得られ、患者の協力性に頼ることなく、良好な治療結果を容易に得ることが可能になりました。

従来、外科手術の適応が選択肢となる骨格性の問題を持ったボーダーラインケースに対し、スクリューを用いたカモフラージュ治療や代替治療が行われてきました。カモフラージュ治療は、骨格的改善は困難ですが、歯の移動により顔貌の改善を主な目的としたものであり、骨格性反対咬合に多く応用されています。一方、代替治療とは外科的矯正治療を行った場合の変化に匹敵する治療効果を得ることを目的としたものであり、開咬やハイアングルの上顎前突症例、ガミースマイルを呈する症例などが適応となります。このようにスクリューの応用により、従来は骨格的な改善を行うために外科的矯正治療を適応せざるを得なかった症例が、外科処置を併用せざとも、ある程度の骨格的改善が行えるようになり、患者の負担を顕著に低減することが可能となりました。これは従来困難であった歯の圧下や遠心移動などを効率的に行えるようになったためであると思われます。

しかしその一方、過度な歯の移動は後戻りを誘発し、矯正治療後の安定性を低下させる要因となります。歯の移動に際しては口腔周囲筋の機能的な問題等も十分に考慮する必要があると考えられます。従来使用してきたヘッドギアなどの顎外固定装置や舌側弧線装置などの口腔内装置に代わり、スクリューが利用されるようになり、治療結果の予知性は極めて高くなっていますが、今後10年、20年の長期予後安定性までを含めた予知性を高めていくためには、代替治療の限界を見極めて対応していく必要性があります。

本セミナーでは、開咬患者に対して行った代替治療を供覧し、その骨格的改善効果について述べる予定です。また、骨格性反対咬合に対して行ったカモフラージュ治療の症例を供覧し、その限界や注意点について考察します。加えて当講座にて歯科用コーンビームCTを用いて行った上顎前歯の移動様相の検討結果を基に、過度な移動に伴う偶発事項について述べ、皆様と共に代替治療の可能性とその限界について議論したいと考えています。